

第6回なごや化学物質リスクコミュニケーション懇談会会議録

— 会議の概要 —

1 日 時：平成19年8月30日（木）
午前10時から午前12時

2 場 所：名古屋市役所第17会議室

3 参 加 者：

（1）委員 以下の14名（ は議事進行役）

ア 市民

安藤 美和	公募委員
杉江不二子	三環の会、なごやエコキッズ環境サポーター
福田 純子	環境カウンセラー
森田登喜子	公募委員

イ NPO

太田 立男	NPO法人愛知環境カウンセラー協会
-------	-------------------

ウ 事業者

伊藤 豪	愛知県鍍金工業組合理事長
奥山 雅章	大同特殊鋼株式会社星崎工場施設室環境法規制チームリーダー
小池 正廣	東レ株式会社名古屋事業場環境保安課長
米森 正夫	二チ八株式会社環境室室長

エ 学識経験者

齋藤 勝裕	名古屋工業大学大学院教授
藤江 幸一	豊橋技術科学大学工学部教授
八尾 哲史	岐阜県立森林文化アカデミー准教授

オ 行政

宇佐美義郎	名古屋市環境局環境科学研究所長
酒井 幹彦	名古屋市環境局公害対策部主幹（化学物質）

（2）事務局 環境局公害対策部長始め6名

4 傍聴者数：0名

5 議 題：

- （1）モデルリスクコミュニケーションの開催結果について
- （2）今後の懇談会の進め方について
- （3）その他



6 配布資料：

- (1) 資料1 第5回懇談会で出た意見の概要
- (2) 資料2 - 1 モデルリスクコミュニケーションの開催結果について
- (3) 資料2 - 2 モデルリスクコミュニケーション報告
- (4) 資料2 - 3 モデルリスクコミュニケーションのアンケート結果
- (5) 資料3 今後の懇談会の進め方について(案)
- (6) 参考資料 INAEI トリトン(地域ミニコミ紙)
- (7) 参考資料 かんたん化学物質ガイド 殺虫剤と化学物質

— 会議の内容 —

1 開会

(事務局)

本日はお忙しい中、本懇談会にご出席くださりましてありがとうございました。

まず、本日の資料の確認をお願いいたします。本日の次第のほか、資料1、2 - 1から2 - 3、3の5種類、をお配りしております。また、参考資料としてニチ八(株)さん周辺の地域ミニコミ紙であります INAEI トリトンをお配りしております。また、かんたん化学物質ガイド殺虫剤と化学物質が環境省から配布されましたので、あわせてお配りしております。不備がございましたら、事務局までお申し出ください。

それでは、開会に先立ちまして、公害対策部長の河合よりあいさつを申し上げます。

2 あいさつ

(公害対策部長)

本日は、お忙しい中、また、残暑厳しい中、第6回懇談会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

去る7月2日に、懇談会主催の名古屋市初でありますモデルリスクコミュニケーションが、ニチ八株式会社名古屋工場で行われました。ニチ八(株)さん、司会進行役やアドバイザーとしてご参加いただいた学識経験者の方はじめ委員の皆様のご尽力により、活発な意見交換が行われました。ニチ八(株)さんにとっては、工場の取り組みを伝えることができ、地域住民の方にとっては日頃抱えている不安を軽減するよい機会になったと思います。アンケートでは、「リスクコミュニケーションを行うことの重要性を感じた」などの積極的な意見が多く寄せられました。

しかし、このようなモデル事業を行ったのは一つの成果ですが、これを市域に広めていくことが重要です。リスクコミュニケーションがまだあまり知られていないこと、人材や情報が不足していること、など多くの課題が残っています。委員の皆様方がお持ちの情報、それぞれの立場からの意見をいただきながら、リスクコミュニケーションを広めるためのよりよい方策を探っていきたいと考えていますので、よろしくお願いします。

以上、簡単ではございますが、私の挨拶とさせていただきます。

3 注意事項等

（事務局）

これより第6回なごや化学物質リスクコミュニケーション懇談会を開催させていただきます。なお、本日は、新海委員が都合により欠席されています。

ここで、これまでと同様にグラウンドルールを提案させていただきます。できるだけ多くの委員の方に自由にご発言いただくために、「要点を簡潔にまとめてご発言いただく」ということをお願いします。ご承知のこととは存じますが、このルールを念頭に会議に臨んでいただければと思います。

それでは議事進行を藤江委員にお渡しいたします。よろしくお願いいたします。

4 議題

（藤江委員）

本日の予定ですが、議題は2点でございます。「モデルリスクコミュニケーションの開催結果について」と「今度の懇談会の進め方について」です。資料に基づき説明していただいた後、皆様方と意見交換を行ってまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、議題1「モデルリスクコミュニケーションの開催結果について」に入ります。7月2日にニチハ株式会社名古屋工場で開催されましたモデルリスクコミュニケーションには、委員からも多くの方にご参加をいただきました。また多くのご意見を賜りました。その開催結果を事務局から報告よろしくお願いいたします。

ア モデルリスクコミュニケーションの開催結果について

説 明

（事務局）

モデルリスクコミュニケーションには、本日お集まりのほとんどの委員の方は当日ご参加いただいたのですが、ご参加されていない方もいらっしゃいますので、当日の様子について報告させていただきます。

○資料2 - 1

当日の参加者につきましては、意見交換参加者は委員の皆様方を含め19名でした。それ以外にも傍聴者は26名で、ニチハさん近隣の野跡学区住民の方、化学物質取扱事業者の方にご参加いただいております。

モデルリスクコミュニケーションについては、「モデルリスクコミュニケーション報告」（資料2 - 2）としてとりまとめ、当日お集まりの皆様にお送りさせていただきました。その他、工場近隣の町内会の方に、回覧をしました。これと、アンケート集計結果（資料2 - 3）につきましては、名古屋市の公式ウェブサイトにも掲載いたします。

○資料 2 - 2

地域住民の方に配布することを意識して、写真などを多用して報告書としたものです。

当日の内容ですが、はじめに八尾委員の司会により、オリエンテーションが行われました。まず、スケジュールの確認があり、続いて、特に地域住民の方は、「リスクコミュニケーション」で何を行うのかよくわからないということがありますので、リスクコミュニケーションが必要になった経緯等の説明がありました。なぜこのような会が開催されたのかについては、「野跡学区のため」に「よい地域作りのきっかけ」に、ひいては「名古屋市全体のため」という話がありました。

続いて、自己紹介では、簡単に名前と「この会に期待すること」を発表しました。市民の方は普段から悪臭のことなどに不安を感じており、工場の方は自分たちの工場のことを知ってほしい、また工場を見た感想を聴きたいという希望をもってみえました。アドバイザーの方からは安全・安心への理解の促進、また、化学物質の有用性と有害性両面の理解を期待するような声がありました。また、名古屋市からはいろんな企業に広がってほしいなどがあげられました。

次に、工場の概要の説明がニチ八担当者の方からありました。ニチ八さんはハードボードのメーカーとして設立されました。名古屋工場は工場地域にあり、北側に住宅地、近くにラムサール条約で有名な藤前干潟があり、そのため環境面において注目の高い場所だということでした。主な製品については、住宅の写真を用いてニチ八さんの製品がこのようなところに使われておりますと紹介がありました。成型方法については、工場見学で見る工程ということで、どういった仕組みで成型されていくか説明がありました。

工場見学は4班に分かれて行いました。最初に製造工程の説明があり、紙すきのような要領で成型されていく抄造のラインを見学しました。その後塗装、ニチ八さんの化学物質管理で主要なラインを見学しました。他に、マイクロバスから自家発電所、排水処理施設を見学しました。

工場見学後、化学物質のリスクに関する説明が事務局及び藤江委員からありました。塗料に含まれる成分として、トルエンやキシレンなどがあると説明があり、このようなものを減らしていくことは、環境に対する影響を減らすだけでなく、資源の有効活用にもつながると説明がありました。また、一般的に、リスクといわれるのは有害性をさしていることが多いのですが、リスクというのは有害性ではなく、有害性の程度とそれをどれくらい取り込んだかの両方で決まるという話がありました。

続いて、環境への取り組みに関する説明がニチ八の担当者の方からありました。VOC 大気排出量推移のグラフがありますが、現在のところ約5割程度削減（平成12年度比）されています。目標として平成22年度には7割削減したいと考えているという説明がありました。環境設備管理については、自家発電の仕組みなどの説明がありました。リサイクルへの取り組みについては、業界初の端材リサイクルプラントがいわき工場に建設され、名古屋工場にも同様の施設があると説明がある。回収量は平成13年度の5000トン弱から平成18年度の2万トンにまで達成していると説明がありました。

これまでの説明や、工場見学を受けて、八尾委員の司会進行のもと意見交換が行われました。

最初に出た意見は、住民の方が一番関心のあると考えられる内容で、「（塗装とは異なる）

悪臭がひどい」という質問です。これに対してニチハと名古屋市から、実際に悪臭を放つような作業が以前はあったけれど、今はないということで名古屋市も確認しているとのことでした。今年（平成19年度）の夏は悪臭の原因と考えられる作業が全て廃止されてから初めての夏ということでした。

次に「VOCの削減目標は達成可能か」という質問です。できれば100パーセント水性塗料に転換したいのですが、今のところは品質的に不可能です。しかし、少なくとも目標は達成できるでしょうと説明がありました。

次に「悪臭の人体への影響はどうか」という質問です。アドバイザーから、化学物質によって人体に影響が出るということと、悪臭により例えば気分が悪くなるとか生活環境に影響を与えるということは別のことなので、それぞれ対策をしてくださいという話がありました。

次に「工場から排出されている煙が気になる、夜になるとひどい」という質問です。ニチハさんから、それは水蒸気ですという回答がありました。アドバイザーから、夕方になると水蒸気は湯気として見えやすくなりますという補足的な説明がありました。

次に、「塗装工程での臭いにはどう対処しているか」とについて質問がありました。これは実際に工場見学を行ったから出た質問だと思います。ニチハさんから、塗装ブースを設け室内にとどまらないように建物の外へ排気していますという説明がありました。それに対して、建物の外に排気すると近隣の住民に影響が出るのではないかと質問が出ました。そこで名古屋市から、ニチハさんの周辺は名古屋市の中でも濃度が高いほうですが、特別高いというわけではなく、規制基準値を守っている。しかし、濃度は守っていても排出量が非常に多いので量を減らすような努力を続けてほしいという説明がありました。アドバイザーからは、近隣住民の方が体に取り込む量は有害と考えられている量よりは十分に小さいので心配はないのではないかと説明がありました。

次に、「作業者のシンナー中毒は大丈夫か」という質問です。ニチハさんのほうから健康診断や換気という方法で努めていますという説明がありました。

最後に、「粉じん公害についてどのような対応をしているのか」という質問です。ニチハさんから、粉じんが排出されるラインでは粉じんを集じん機により集めて原料に戻しています、また粉じんの測定も行っていますという説明がありました。この説明に対して、「湿式よりも乾式の設備から粉じんが多く出るのではないかと」という質問がでました。実際に乾式のほうが粉じんは出やすいのですが、柄の深い製品をつくるには湿式では対応できないという説明がありました。消費者のニーズと環境影響のバランスを考えていくことが大切であると説明がありました。

○資料2 - 3

アンケートの集計結果です。多くの方に回答をいただきました。

「この会に参加してニチハさんの化学物質管理について理解できましたか」とについて、ほとんどの方はだいたい理解できた、あるいはよく理解できたということです。傍聴者の中には理解できなかったという方も数名みえました。

「今後このような機会があれば参加したいか」とについて、参加したくないという方はいませんでした。今後もぜひ参加したいということでした。

次に自由意見ですが、非常にたくさんいただき、関心を持っていただいたと思っています。

工場見学については、実際に工場見学をして塗装作業員の方の健康が気になった、あるいは工場見学をした結果説明がよく理解できましたといった意見が出されています。

化学物質のリスクに関する説明については、一般的に理解できたという意見が多かったのですが、市民の方は理解できたのかなあという意見もありました。

意見交換については、客観的に見せていただいて勉強になった、市民の日ごろから思っている意見が素直に聞けたという点でよかったという意見をいただきました。また、司会進行の方のまとめ方・進行がよかった、あるいはもう少し時間があった方がよかったという意見もいただきました。

最後に全体について、ニチ八さんの改善努力が見られる、近所の方は尋ねたいことがたくさんありよかった、住民の方の気になっている点が理解できた、リスクコミュニケーションが今後も必要だという積極的な意見もいただきました。

意見交換

（藤江委員）

ありがとうございました。それでは皆様からご意見を伺いたいと思います。まずは、モデルリスクコミュニケーションの主催として場を提供していただきました米森委員から感想や意見を賜りたいと思います。よろしくお願いします。

（米森委員）

当社でリスクコミュニケーションを行ったのは初めてで、また工場見학을多くの事業者の方を含めて行ったのも初めてでしたので心配はありました。そういった中で開催しましたが、司会進行の方、アドバイザーの方、委員の方々含め多くの方のおかげで、終わってみればリスクコミュニケーションをやってよかったなと感じました。当社ではいつでも工場見学に来てくださいとオープンにしています。しかし、やはり敷居が高いということもあり、また、急に来てすぐに入れるというものでもありませんので、定期的にという言葉が適切なのかわかりませんが、こういった機会や場を設けることが必要だということを感じました。本当にありがとうございました。

（藤江委員）

今回のモデルリスクコミュニケーションは八尾委員の司会進行が実によかったことに尽きるのではないかと私自身は考えております。実際にいろんなことを考えながら進行なされたと思います。気づいたこと、また改めるべきこと等いろいろあると思いますが、まとめてお願いします。

（八尾委員）

モデルリスクコミュニケーションではシナリオがあってないようなものでした。一部の方のアンケート回答を見ていると、想定内の質問が多いとか予定調和に進んだのではない

かという部分が少し見えました。しかし、実際のところ、打ち合わせをしてどんな質問が出るか想定し、ニチ八さんもそれに対して準備をするということはありませんでした。それぞれが準備すべきことをできる限り準備し、後は現場で起こったことを大切にして進めていくという扱いで、実際、私とニチ八さんは直接打ち合わせをしていません。ニチ八さんには当日会場のことでいろいろお世話にはなりましたが、運営等に関してニチ八さんが担当される部分はすべてニチ八さんを信じて、例えば工場見学の段取りや紹介される内容についても事前に介入することではなく、どのような態度で臨まれるかはその場で出させていただきました。そしてもちろん、市民委員の皆さん含め、市民の皆さんとも打ち合わせをしておりません。名古屋市さんとは多少の調整をいたしました。それは場を運営する上で必要な準備だけです。あの会がこのような状態で開催されたということ、まずご理解いただければ幸いです。

私が皆さんにお聞きしたいことが最初に1点あります。リスクコミュニケーションという言葉で、実際に何百社もの企業で行われていますというデータが、NITE（独立行政法人製品評価技術基盤機構）の報告書にあります。ただ、今回のモデルリスクコミュニケーションのような形式で行われている数は少なく、一方的な説明会、パンフレットを配る、お祭りをやる、など、何かコミュニケーションをとっているといったものが多いです。これからの名古屋市のリスクコミュニケーションの推進を考えるにあたっては、これらを広めていくということではなくて、もちろんこれらもひとつの大事なやり方ですが、これらも含めて住民と事業者と行政の三者がどのようにコミュニケーションをとっていくかを考えていけたらと思います。一番手間がかかるであろう、しかし一番効果が高いであろうやり方がこの間のモデルリスクコミュニケーションの形式であったのではないかと思います。

また、おそらく私がこの中では一番リスクコミュニケーションの現場に出ていると思いますので、その経験から申しますと、私のやり方は全国でも珍しいそうです。私の知っている例で言えば、北野大氏が場をさばくというものがあります。ファシリテーターという立場の人間も化学的な知識をもっており、そのほうが場のコントロールができること、また会議の進行を重視することが特徴にあります。私はその場で起こることにできるだけ正面を向いて付き合いたいというファシリテーターのタイプであり、何が起ってもその場の状況を大切にします。今回反省すべき点でもありますが、30分間延長をさせていただきました。あの状況で延長をしないで時間をきって次回に持ち越す、またはその場の状況で延長して行うということ、私ファシリテーター個人の判断ではなく、その場の人たちもその判断に関与して、延長するかしないかを決めるというスタイルを私はとしています。これも賛否両論あると思います。決して私のやり方が唯一無二ではありません。様々なやり方の中から、名古屋に向いたものはどれかをご検討いただけたらと思います。

あの会合がすごくよかったのか、あるいは悪かったのかという評価をすると、どこ行ってもだいたいあのような感じになります。おそらくかなり問題があっても、ほとんど問題がなくても、会の運営をある程度きちんと設計して行くと、住民の方からはあれくらいの意見は出ます。今回ニチ八さんがきちんと心を開いてくれたので、私も安心して会の運営を行うことができました。リスクコミュニケーションに取り組もうとしてくれる企業みなさんは、情報開示をきちんとし、真摯に臨まれますので、会が終わったときにはあのような雰囲気ではほとんどのケースが終わっています。先ほどの米森委員の感想が心の中か

らのものであり、またこの間の状況でいいなと思われるのならば、年に1度、手間ではありますが取り組む価値があると思います。

最近、中国製品が問題を抱えているということがマスコミで騒がれていますが、私自身この何年間か関わってきて、日本の中に製造されている場があり、そこを住民、ユーザーが見にいけるというのは非常に重要なことだと改めて認識しています。どうしても環境意識が高まると、工場を排除したいという気持ちも熟成する部分があると思うので、このバランスをとるのは難しいと思います。しかし、これに対応できる決め手のひとつとして、リスクコミュニケーションという工場と住民の方、あるいは消費者の方とのつながりが大事だと思います。多少値段が高くて、多少自分たちの地域にVOCが出る可能性があっても、目で確認できたり、あの人が作っているのだから有害物質は入っていないだろうと安心したりできる工場が日本にあること。また、企業と住民の関係を、環境に配慮した良いかたちでの日本の産業の発展につなげていくためにも、リスクコミュニケーションはやっていかなければならないことだと思います。それが商品の安心・安全につながって、高くても日本のものを買おうということにつながっていくと思います。

最後にひとつ気にかかることがありました。トリトンに書かれている文章で「化学用語や数値を聞いたところで何になる」とありました。この感覚をもうひとつ上の段階へ高めていかないといけません。マスコミがこのように書いてしまっているということが、シビアな問題をはらんでいると思いました。もちろんここに書かれていることを大前提に、化学用語や数値も聞ける、その意味についても一定の理解ができる、そういう市民を増やしていけたら発展につながると思いました。

（藤江委員）

どうもありがとうございました。お二人からご感想をいただきました。今回のモデルリスクコミュニケーションで準備進行、説明の方法、まとめ方等々いろいろあると思いますが、ご参加いただいた方でも、ご参加いただいていない方で、こういった報告を受けての感想でもかまいません。どなたかご意見、ご感想をいただきたいと思います。

（奥山委員）

私は傍聴者として参加させていただきました。まず思ったことは、受け入れ側である二チ八さんの工場長その他幹部職員が一体となって受け入れ態勢を整えていらっしゃったので、非常にリスクコミュニケーションに理解を示されて工場一体となっているなと感じました。それから、リスクコミュニケーションを定期的にやられるという話がありましたが、日ごろの付き合い、リスクコミュニケーション以外のところでも施設を開放するとか、敷居の高くない住民の方とフランクに話せる環境を作っていく必要もあるのかなと思いました。自分のところはフランクに話せる環境はあるのかと考えますと、わざわざリスクをさらけ出すことが必要なのかという意見も若干あり、あまりできていないので、二チ八さんはすごいなという印象を受けました。

（安藤委員）

あのような会に初めて参加させていただきましたが、どのような交流が図られるのか一

番興味がありました。意外と皆さん普段疑問に思っていることをそのままの言葉で伝えてくださり、それに対して事業者、行政側は答えてくださっていました。その答えが市民の皆さんの質問に対して直接の答えになっているのか、なっていないのか見え隠れして疑問に思うこともありました。一応納得してもらえているのかなという感じを受けました。やはりいい会だなと思いました。このようなことから皆さんが身近なことにも興味をもってくださいればいいので、いいきっかけになったのではないかなというのが素直な感想です。

（杉江委員）

工場に入るところから、ニチ八さんが一体となって受け入れて下さっている印象を私も持ち、とても入りやすかったです。市民の方も工場の方も業者の方もいろんな立場の人が集って、それぞれができることをするというのはいいなと思いました。

ただ、企業の中で企業思念という位置での役割として社長、部長、課長というたて列があるということは十分わかっていますが、それがなくそれぞれ担当の方が今思ったことを率直に言える会になると素晴らしいなと思いました。本当にきれいごとで理想だと思います。と言いますのは、住民の方の質問に対して、もちろん会社の責任者の方は十分いろんなことに熟知しているのでお答えいただいているわけであり、信頼もあります。しかしながら、工場で直接働いている方の声を聞けると人間身があってよかったかなと思いました。きっと、そこで困っていることやこうしたいけどなかなか難しいのだといったような、社内のことを明けて話すと難しいと思いますが、もう少し担当の方の声が聞けたらよかったかなと思います。そう思ってアンケートを拝見させていただきましたが、記述の中でああ住民の方だろうなというのが多かった中で、傍聴者中に事業者の方が8名いらっしゃったのに、その方たちの意見だろうなというものが見つけれませんでした。アンケートにも事業者の縛りのきついこともあって思ったことが書けなかったのではないかなと思うと少し残念でした。これが課題なのでしょうか。私が期待していたこととは違って、なかなか難しいことが大前提としてあるのだなと実感しました。

（森田委員）

会で話を聞いていましたら、モデルリスクコミュニケーションに至るまでの経過が次第に浮かび上がってきました。まず、ある程度住民の方から臭いなどの苦情があり、それに対して保健所も対応をされていたようでした。その中でニチ八さんがいろいろと努力をされ、現在発展途上であるということが次第に話し合いの中で明らかになりました。これらのことは、あらかじめリスクコミュニケーションの会の前にしておくべきことなのか、それともそれが明らかになるのを個々の参加者、傍聴者が聞いたりして理解していくことを期待することなのか、どちらがいいのかなと思いました。あらかじめ知っておいてもいいような気はするのですが、ただ、事前に言うことによってひとつの固定観念を最初に植え付けることになるという怖さもあると思いました。

それから大変感銘を受けたのですが、トリトンのように数値なんかどうでもいいと言ってしまいたい人もいる中で、複数の住民の方はかなりきちんと考えていらっしゃいました。ニチ八さんが行ってきたことを非常に良く見てきて、それに対して感覚的な対応ではなく、きちんと把握しようとしていらっしゃいました。このあたりにこれからのよい関係を築く

可能性を感じました。

また住民の方の鋭い感覚がわかりました。私も特に従業員の方の健康は大変気になりました。ひとりの決まった方が塗装ブースに入っているとすると、いかに健康診断をしても結局悪くなっていくのをみていく結果になってしまい、それではいけません。もう少し労働環境という点で、例えばローテーションをどうにかできないかと思いました。地域住民が自分たちのことだけでなく従業員の健康も気にするのは地域で暮らす仲間が工場働く人だ、という見方がとてもいいと思いました。そういう連携した捕らえかたが、リスクコミュニケーションを市民のものにするのだと思います。全然別の住民があって、工場があって、その間が断裂しているところを何とかコミュニケーションしようというのではなくて、共通するものがある。さらに、情報が公開共有されるという考え方があればいいと思いました。また、アンケートの中にも共感できるものがいくつかありました。

（小池委員）

事業者から見ますと、藤江委員がおっしゃられたように、司会進行がすごく良かったと感じます。地域の方が工場に対し疑問・誤解を抱いておられることは理解できます。先ほど出た夜の煙の話ですが、私どもの工場でも臭気問題が発生した折、住民の一人が、東レの方角から時々臭いと煙が出ていることがあると言われました。工場の中で調査した結果、推定ですが水蒸気と思われます。今回のモデルリスクコミュニケーションでは誤解に対し、しっかり納得するまで説明していただけたと思います。

また、森田委員の意見で、地域の皆さんには情報を先に開示した方がよいのではないかとありましたが、地域の皆さんにはきっと出席したら聞いてみたいと考えていらっしゃる事柄がいくつかあるのではないかと思います。ですから、地域の人からいろいろお聞きしてお答えしたほうがいいのではないかと思います。

事業者にとっても良いリスクコミュニケーションであると同時に、地域の方にとっても疑問・誤解が解けたという点でよかったのではないのでしょうか。

（藤江委員）

水蒸気の話がありましたが、世の中の認識はかなり違っていています。今オリンピックの関連で中国の大気汚染の問題がいろいろたたかれています。テレビや新聞の大気汚染の写真をご覧になった方はいらっしゃいますか。あそこに必ず出てくるのは冷却塔からの水蒸気です。いささかびっくりです。大きな円筒から大量に煙が出ているところがありますが、あれは煙ではなくて水蒸気です。それを堂々とマスコミが取り上げているわけですから一般の方が誤解するのは当たり前です。もっと情報発信をするか、あるいはマスコミ教育をするかしなければいけないなと思います。

（齋藤委員）

この間の会は素晴らしいものだったと思います。司会の方、二チ八の方、皆様方に敬意を表したいと思います。

私は、あのような会に参加させていただいたのは初めてでした。あらゆる意味で興味深かったです。あの会で私が一番気になったことは、有機溶媒の臭いが話された一方で、音

については話が出なかったことです。私は職業柄有機溶媒の臭いに慣れてしまったので、あまり臭いは気にならなかったのですが、その分これはひどいなと感じたのが音でした。しかし後の意見交換の時には、住民の方から音がうるさいというのは出ませんでした。ということはニチ八さんが音の出るようなものを工場の真ん中に置くとか、いろいろ周辺対策に気を配っているためなのだなと改めて感じました。

会議の進め方ですが、先ほどからありますように八尾委員の素人離れした司会進行、住民の方の疑問、疑問に対する藤江委員の明快な説明があり、素晴らしかったです。おそらくあの会に出られてニチ八さんに対する印象を悪くした方はいらっしゃらないと思います。工場長はじめにニチ八さんの従業員の方がたくさん出られていて、時給をかけると結構なお金がかかるとは思いますが、それだけのコストパフォーマンスは十分ありました。あれだけの好印象を得るためなら、人員をかけてでも、他の企業も年に1、2回行うことは非常にいいことだと思います。これからもぜひ続けてください。

ただひとつ、私が残念に思ったことは、もう少し住民の方の意見を聞きたかったことです。住民の方の意見に対して工場から説明があり、うまく次のところへ流れていくというように、何か意見を出してそれに対して返答し、さらに返答に対してまた意見が出る、このようなことがあると掘り進めていけるとと思います。このようなことを続けると一般の方の信頼感も深まっていくと思います。ただ時間の関係もありますので、このような会議を続けていくと良いと思います。

リスクコミュニケーションはできるだけ多くの会社に行ってほしいと思います。

（宇佐美委員）

私を含め行政は、従来リスクコミュニケーションという形式ではなくて、何か問題があった際に工場側が開く説明会に参与してきました。その関係で言えば、今回のリスクコミュニケーションは何か問題が起きてから行われるのではなく、会社側が自主的に行うということで違いがあると思いました。しかし、内容的には、住民からの意見は、何か問題があってから行われる説明会での意見とあまり変わりはありませんでした。住民の方は、問題が起きたときに行われる説明会でも、日頃から起きている問題のことを言われます。結局そういう意味では、住民の方は日常的に会社側に対して言いたいことを、ずっと腹の中に入れて我慢してきているのだなという印象でした。

今回のリスクコミュニケーションでは八尾委員の司会による進め方、アドバイザーの先生方による専門の説明があり、今までの行政が加わった住民説明会とは違うなと感じました。なぜかというと、説明会での司会は会社側が仕切り、行政が補足説明をします。しかし、住民の方は事業者の方にも話をするのですが、どちらかというと、矛先が話しやすい行政のほうにかなり向かうのです。住民が行政に意見をぶつけ、行政から事業者に伝わるという形式をとりたがるという問題があって、一体誰が行っている説明会なのかという印象が残ったときもありました。今回そのようなことがほとんどなかったのも、進め方が良かったと思いました。このような方法があったのだと知りましたし、このような方法でやるべきだなと思いました。今回のモデルリスクコミュニケーションはひとつのきっかけで、問題がないときに自主的に事業者から行うリスクコミュニケーションは大変いいことだと思います。また、事業者の方には、コミュニケーションをこのような会で構えることなく、

住民の参加できる会社のイベント等を含め、日頃からの触れ合える場の設定を行っていくことがこれから重要になっていくと思いました。そうすることによって、何か問題が起きたとしても、このようなコミュニケーションをやっていることで住民の方に対して事業者の方もきちんとお話ができると思います。

（酒井委員）

皆様からたくさんの意見をいただき本当に感謝しています。こんなにうまくいくとは思っていませんでした。もっといろんな意見が出るだろうと心配していた部分もありました。住民の方の意見に対して皆さん適切に対処していただき、また第三者として先生方の説明に対しては住民の方々はじめ皆さん納得していただきました。最近、行政が説明してもなかなか納得していただけない部分がございます。先生方の説明で納得いただけたので、企業説明会等のなかでも学識経験者がいて納得いただけるという意味で、このようなリスクコミュニケーションはやはり必要だなと思いました。八尾委員のおっしゃったように、いろんなリスクコミュニケーションの説明会があると思いますが、今回のようなリスクコミュニケーションの会合はあまり広まっておりません。名古屋市としてはこのようなリスクコミュニケーションをもう少し広げていく必要があると思っています。次の議題にもありますが、今後このようなリスクコミュニケーションを広げていくためにはどうしたらよいか、ということをお前提に考えておりますのでよろしくお願いします。

また、ニチ八さんが今後も続けていきたいとおっしゃってくださいましたので、ぜひとも続けていっていただきたいです。ほかの事業者の委員の方々にも、ぜひうちでもやりたいと共鳴していただけたらと思います。

（藤江委員）

ありがとうございました。当日ご参加いただいておりますが、今日のこの議論をお聞きになってご感想をお持ちになっておられると思いますので、お願いします。

（福田委員）

リスクコミュニケーション当日、仕事をしながらすごく心配でした。というのは、今お話いただいたように、スムーズにいい感じでいくとは思っていなかったのも、何か嫌なムードに包まれるのではないかと心配していました。しかし、八尾委員、藤江委員、齋藤委員、名古屋市行政のおかげで素晴らしいモデルリスクコミュニケーションになったようで、本当に良かったと思います。これからもこれが広まらなければいけないと思いました。

そのためには八尾委員のような人をひきつけ、しかも中身をしっかり把握してくださる司会進行の方、いろんなキャラクターの人材が育っていかないと難しいなと思いました。これからの課題になると思いました。

今日話を聞いていて一番感動したのは、主催側の正直さです。正直に言う勇気があったと思います。勇気のコミュニケーションができていたと言いますか、名古屋市も押さえ込むことを全くしない正直さを感じました。ニチ八さんの質問に対する答え方をみても、大変正直に事実を述べていらっしゃり、実際に事前の打ち合わせや台本ができていた場合も少なくないと思うので、これからもその正直さをもったリスクコミュニケーションを続け

ていかなければいけないなと、初心を忘れずにそのまま行っていかなければならないなと思いました。

また、私もトリトンを読んで「化学用語や数値を聞いたところで何になる」というのがすごくひっかかりました。でも今の市民レベルはこれくらいだと思います。地球温暖化、CO2削減などの言葉も最初に登場してきたときは難しい言葉で、市民はそれらを新聞等で目にしても何のことだかというレベルだったと思います。それが、ずっと言い続けているうちに今では市民レベルの言葉になってきたと思うので、こういった化学物質の用語も地道に言い続けていけばいいと思います。アンケートで「主婦には関係ないわ」というコメントがひとつ出てきたのですが、これも同じことだと思います。今後に期待したいと思います。

（太田委員）

皆さんのお話の中で私が特に言いたいことはおっしゃっていただいたので、ただひとつ違う観点、コミュニケーションという観点から述べたいと思います。

私が関連してきているものに市民協働があります。例としてなごやの環境塾があげられます。環境協働をやろうという名古屋市の案を受けてはじまりました。一番はじめは行政側の一方的な説明があり住民側は受け取って終わりといったように、コミュニケーションができていませんでした。それが徐々に変わっていったのですが、コミュニケーションを市民と専門家と行政でとっていくには情報開示、問題の共有化、共通理解が必要だとそこで実感しました。行政側がコミュニケーションに慣れていないなということは環境塾が始まったときにも思いましたが、繰り返すことによって徐々に慣れて、市民がどう考えているか知るということにつながると思います。

コミュニケーションという観点からお話を聞かせていただきました。これからのわれわれの活動においても役に立つことだと思いました。

（伊藤委員）

自分の会社をさらけ出すということは大変重要なことだと私も思っております。さらけ出さないと近隣の人のご理解をいただけないかなと思います。

私の会社は住民の方がすぐ隣に住んでおります。1メートルも離れていません。前も3メートルも離れていません。たくさん周りに住まれています。日ごろから音がうるさいとか、即反応がきます。私が歩いていても苦情を受けます。

平均10人の中小企業の会社が皆さんの目の前にあります。大企業とは少しやり方が違ってくると思います。今後小さな企業がリスクコミュニケーションをどのように行っていくのか、リスクというだけで反応を起こす方もいらっしゃると思います。コミュニケーションをどのようにとっていくかも名古屋市の行政からご指導いただき、行っていけたらいいのかなと思います。

（藤江委員）

ありがとうございました。私も少し自分の感想を述べさせていただきます。

実は少し身構えて参加させていただいたのですが、結果的には結構リラックスできまし

た。司会の重要さはみなさんのご指摘のとおりだと思います。一方でアドバイザーの役割も重要であると十分認識しました。いかに易しく、わかりやすくものを語れる、説明できるかという重要性を認識しました。一方的に説明するときは比較的わかりやすくできるのですが、相手から突っ込みが入ったとき、どれだけわかりやすくそれに対してその場で反応できるのかということが重要だと思いました。難しい言葉での説明はいくらでもできると思いますが、それをやってしまったら市民の目線から外れてしまうのでやってはいけないことだと思いました。その点で、今回齋藤委員と私がアドバイザーとして参加させていただきましたが、やはりいろんな分野の人が必要だと思いました。法律、規制に詳しい人、あるいは化学物質のリスクに詳しい人、エンジニアリングに詳しい人などが必要なのだと思います。

また市民側に対してですが、やはりとらえかたがどうしても「0」か「1」か、安全かそうでないか、そのような考え方になっています。ところがリスクはそうでなくて連続です。「0」はなくて、限りなく「0」に近いところから危ないところまで連続してあるということを理解していただく必要があると思います。われわれの説明でもリスクとはどういうものか、もう少しわかりやすく説明できるように、あるいは資料等を準備しておかなければならないと感じました。

イ 今後の懇談会の進め方について

説 明

（事務局）

それでは資料3に基づいて今後の懇談会の進め方について説明させていただきます。数点提案をさせていただきたいと思います。

まず枠の中に書いてありますが、現在の委員の皆様方の任期は今年の10月までになっております。委員の皆様につきましては、任期は2年間ですが、要綱上は再任できることになっておりますので、再任をお願いしたいと考えています。こちらが提案の第1点であります。

続きまして、当面のリスクコミュニケーションの推進策ということです。なごや化学物質リスクコミュニケーション懇談会の来年3月くらいまでの当面の推進策ということで、手引書を作成しホームページで公開、あるいは事業者に配布を考えています。手引書につきましては、リスクコミュニケーションの手法や運営的なこと、あるいは事業者の方に啓発する内容のものを考えています。

また、講演会の開催を、19年度の末ごろに考えております。対象は事業者の方で、内容はリスクコミュニケーションの普及啓発ということで、なごや環境大学と連携しながら行うことを考えています。

今後（第7,8回）の懇談会の議題についてですが、1番目にリスクコミュニケーションの普及について、先ほども議論がありましたが、リスクコミュニケーションが普及していくために必要な枠組みや組織、あるいは情報について意見交換をお願いしたいと思います。具体的にはリスクコミュニケーションに必要な人材、ファシリテーターやインタープリタ

一等の確保、化学物質のリスクに関する情報の整備、中小企業におけるリスクコミュニケーションの推進、身近な化学物質に関する情報の提供、など、このような課題についてご検討いただきたいと思います。

2 番目に手引書の作成について、懇談会やモデルリスクコミュニケーションの検討内容をふまえて、事業者の方が自主的にリスクコミュニケーションを行う際に留意すべきこと等を具体的に記載した手引書を作成していこうと考えております。

続いてスケジュールですが、本日 8 月 30 日に第 6 回を行っておりますが、第 7 回は今年の 11 月から 12 月、第 8 回は来年度 1 月から 2 月を予定しております。リスクコミュニケーションの普及について、手引書の作成について検討したいと考えています。

意見交換

（藤江委員）

ありがとうございました。

ご説明にありましたように 10 月で現委員である皆さんの任期が切れますが、年明けまで延長して第 8 回までこの懇談会を進めていきたいというご提案です。これについてご承認いただけますでしょうか。

（委員一同）

はい。

（藤江委員）

ありがとうございます。この件についてはご承認いただけたということで、来年の 1、2 月ごろ行う予定の第 8 回まであと 2 回懇談会を行うことになると思います。

第 7 回、第 8 回に議論していただく内容は、「リスクコミュニケーションの普及について」、「手引書の作成について」ですが、例えば次回の 11 月または 12 月には手引書の土台ができており、そこで議論して最終的に第 8 回で完成といったようなことになるのかなと思います。もう少し詳しい内容がございましたらご説明いただきたいと思います。いかがでしょうか。

（事務局）

次回の懇談会のときに、事務局として考えている手引書の案を提示させていただきたいと思います。またリスクコミュニケーションの普及についても同様に事務局の案を提示させていただきたいと思います。

（藤江委員）

少し議論しにくい面もあるかと思いますが、リスクコミュニケーションの普及をどう図っていったらよいか、また手引書についてどんなコンテンツが入るべきか。本日モデルリスクコミュニケーションについていろいろ議論をいただきましたが、それを踏まえながらフリートキングでいきたいと思います。いかがでしょうか。

（酒井委員）

名古屋市として補足をさせていただきます。

説明がありましたように、第7回に素案を提示させていただきたいと思います。基本的には手引書自体はさほど難しくないと思います。今回のモデル事業はニチハさんの協力を得て懇談会が行いましたが、今後手引書を作って、皆さんリスクコミュニケーションを行ってくださいと言っても、おそらく行っていただけないのではないかと思います。そこで、推進する何らかの組織が必要になってくると思います。懇談会をそのまま継続して、懇談会でモデルリスクコミュニケーションを行っていくというのも、ひとつの手ではあると思います。ただ本当にそれだけでいいのかなという部分があります。課題にも挙げていますが、人材の確保、リスク情報の整備等、いろいろあります。もっといろいろな分野の方が入らないと難しい部分があるとも思います。この辺も踏まえて、どのような組織が考えられるかということも事務局で作りながら、次回第7回では皆さんに具体的な議論をさせていただきたいと思っています。これまでも市民の方からいろんなご意見をいただいております。例えば費用の問題で、リスクコミュニケーションで人材を呼ぶのに会社側が費用を出すと、信頼が得られないという見方もあります。この辺をどうしていくのか、人材の確保と費用負担、それができる組織を考えていく必要があると思います。今日は資料をご用意してないのですが、皆さんからフリーにこんな組織がいるのではないかとといった意見をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

（藤江委員）

少なくとも人材はこれからかなり必要になるだろうと先ほどもありました。もうひとつ酒井委員からありましたように、リスクコミュニケーションのための人材斡旋のような機能も必要なのかもしれません。皆様からいろいろご意見いただきたいと思います。いかがでしょうか。

（米森委員）

冒頭にも話をさせていただきましたが、やはり司会者、及び知識ある専門の方のアドバイスを公平にいただけたことが、今までの会社の説明会とは全く違う印象にしたと思います。住民の方もご理解して、満足して帰っていかれたという印象を私も持ちました。そういう方々の人材をどのように確保していくかが重要だと思っています。

（太田委員）

今後の進め方として、なごや環境大学と協働することは、すごくいいと思います。昨年年ごや環境塾3期生と環境カウンセラー協会で、化学物質についての講座を行いました。委員の方にも講師として話をさせていただきました。その結果、常時募集人員の30名ほど講座に参加していただきました。受講したいという登録メンバーも60名ほどいました。このように少しずつでも環境大学と協働で行っていくのは効果的だと思います。また環境大学の会場を工場にするなど、工場側と一緒に環境大学としてやっていく等、それを重ねていくことで効果が上がっていく気がします。

（小池委員）

人材の問題に関わりますが、多くの事業所が継続的にリスクコミュニケーションを開催する場合には、それなりの人数、特に司会、アドバイザーの絶対数が必要になってきます。事業所としては、継続性から見ても開催前にこのような体制が整う必要があると考えます。

（藤江委員）

ありがとうございます。やはりいろんな面で人材育成が求められていると思います。役所の2007年問題として、団塊の世代、昭和45年前後の公害問題が華やかな頃に入庁された方々が定年ということになります。そういう状況で、その方々を穴埋めする人材が必要です。また、このようなリスクコミュニケーションなど、産学官でやらなければいけないことがたくさんあります。それを担う人材が求められていることも事実です。国もそのあたりのことはわかっているようで、文部科学省も人材育成をするときに補助しましょう、あるいは経済産業省も音頭をとって、大学で環境科学に関する人材育成をしませんかという話があるようになっていきます。名古屋市では、例えば名古屋工業大学など化学系の方を中心として補助金等を活用しながら人材育成のコースを大学院につくり、社会人の方も受け入れて人材育成をしていこうというがあってもいいのではないかと思います。ぜひそのような制度を利用して、産学官と市民が連動した人材育成をしていけばいいのではないかと思います。本学も来年度から持続社会コーディネーターという人材を育成するコースを学部と修士課程で始めようとしています。このようなものを利用して、その中にファシリテーター育成やアドバイザー育成をやったらいいのではないかと思います。5人くらいの定員のコースですので、社会人入学として来てもらい、2年程度の期間、実務を通じた教育・訓練を経て社会に戻る、そのようなことが可能になります。

他にいかがでしょうか。

（八尾委員）

人材育成の話が出てきているので私も加えさせていただきます。

ファシリテーターは今のようになんて新しく大学の補助金を利用するのもひとつの手だと思います。実は名古屋には有数のファシリテーター養成学校があります。南山大学は心理・社会学系の大学ですが、日本でも3本の指に入る優秀なファシリテーターの先生、津村先生がお見えになる大学です。人材も輩出しています。ファシリテーターは単なる会議の司会というのではなくて、心理的状況、社会的状況、おかれているパワーバランス、人と人との関係性をとらえながら、次にどうしていくべきかみんなで考えながら促進するというのが大きな役割です。そういう意味で南山大学は名古屋の大学ですから連携を考えていただければいいのではないかと思います。

アドバイザーは、どうしても大学の先生となると、人数が少ないことと忙しいことで難しくもありますが、名古屋近郊には大学がたくさんあるので、大学の先生を柱に据えることは良いと思います。また環境省が化学物質アドバイザーという制度をつくっています。民間企業とか、東海地区では私が知っている限りだと、蒲郡の薬剤師さんが化学物質アドバイザーです。その方と私2人でリスクコミュニケーションをしたこともあります。このようなものを活用することを視野に入れていただくといいと思います。

今議論であげられていないのは、その前の段階、最初に相談に乗ってあげる人、やり方、何から行っていくか、まずは新聞を出しましょうとか、そのようにどこからスタートしていくか、二人三脚で考えていける組織や人が必要なのかなと思います。その役割を行政が担うのか、市民団体がつくるのか、会社がおきるのか、いろんな形態があると思います。

（藤江委員）

ありがとうございます。そのようなところこそ、化学物質アドバイザーの方にうまく動いてもらうのがいいのではないかと思います。人材確保と同時に組織をつくっていかねばならないのかなと思います。化学物質アドバイザーが愛知県には1人しかいませんから、せめて片手、いや両手くらいはほしいですね。

（小池委員）

八尾委員のお話を聞いて特に感じたのは、私どもも年に2回各々15分程度の環境説明会を行っておりますが、やや一方的で、その後の懇談会でコミュニケーションを図っているという状況です。これはこれで良いとは思いますが、もう少し改善したいなという意識があります。しかし、いきなりこのモデルリスクコミュニケーションにまで飛躍するのは難しく、段階的にどこまで進めるかなどの相談に乗って頂ける方が何人かいらっしゃれば、事業所としてはありがたいですね。

（齋藤委員）

今組織をおくという話がありましたが、それには大賛成です。この会議を進めていき、モデルリスクコミュニケーションが行われるようになりました。どこかでフィードバックしてより改良をしていく組織は必要だと思います。だから、大きくなるにせよ小さくなるにせよ、中核となる組織を常においておく必要があると思います。リスクコミュニケーションを開く場合には司会など様々なことが必要になると思います。その人たちをどうやって派遣していくか。リスクコミュニケーションをやる会社側にとっても非常に大事だと思います。ですから、人材がそろうための組織を準備しておいて、やりたい会社側には教育をするなどしておくとしリスクコミュニケーションがやりやすくなると思います。

もうひとつ太田委員の意見にもありましたが、なごや環境大学と連携して行うのは非常に大切だと思います。先ほどから問題になっております、トリトンの「化学用語や数値を聞いたところで何になる」といったコメント。藤江委員がおっしゃったように、化学は物理や数学と違った性質をもち、白黒はありません。連続しているのです。白もなければ黒もない、すべてが灰色です。ただ灰色の中でもちょっと白の部分はたぶん大丈夫だろう、ちょっと黒い部分はまずいなということだけです。ではどちらが白くてどちらが黒いかといわれるとまた困ってしまいます。こういう話のところで数値や値はどうでもいいといわれると、灰色がなくなってしまいます。難しい話で、このような意識をどうすれば良いかといわれると、言い方は悪いですが、多少なりとも勉強していただくことにつきます。講演会等を頻繁に開いていけば、だんだん意識が高まり、一般の方々の中にも知識が積み重なっていくと思います

（藤江委員）

ありがとうございました。齋藤委員の話にありましたように、国民に「0」か「1」かということ植えつけてしまったのには、国の責任が大きくあります。原子力が絶対安全ですと言ったことがそもそもの間違いだったのです。リスクという言葉を使いたくなかったのかもしれませんが、安全ですと言ってきたから、すべて「0」でなければいけなくなってしまったということです。「0」か「1」かでなくて連続であり、リスクなのだと認識してもらう努力を、我々はこれからもしていかなければならないと思います。

ここで、議事進行を酒井委員に交代します。どうもありがとうございました。

（酒井委員）

いま、人材確保の必要性があるとかいろいろな意見が出ております。そのあたりのことで市民委員の方からご意見はありませんか。

（森田委員）

人材育成などを図りながらリスクコミュニケーションを何とか進めていこうという話がありました。事業者を対象に、ぜひリスクコミュニケーションをやってくださいと働きかけることが第一だと感じています。

一方で、事業者の方にだけ働きかけていていいのかという面があると思います。今回のモデルリスクコミュニケーションにおいて、参加者8名傍聴者13名の計21名の近隣住民の方が参加していました。その方たちをどのように集めたのかという疑問を持ちました。「リスクコミュニケーションをやってください」と住民の方から言えるための住民教育など、住民に働きかけていくという視点も必要だと思います。そうでなければ、15分説明して後は懇親会、というようになってしまいます。そのような懇親会に参加する人は、野跡の場合に当てはめると、地域の役のある参加者8名プラスアルファということになり、傍聴者を排除してしまう傾向になるのではないかと、不安に思いました。工場のリスクを気にしている人は結構いるのです。でも、工場からの案内が地域の役がある方にしか届かない、全員には届いていないという可能性があります。数値なんかどうでもいいと言ってしまふ一般の方に、どこかで働きかけるということも、すぐに実現できなくても欠いてはいけない大事な視点だと思います。また、そういった無限なことを起こしていく人材も作り続けていく必要があります。たとえば環境大学に参加される常時30名の方々、すごいなと思います。私は環境関係の会に入っていない方々との集まりで話をするのですが、参加者の知識は、本当にばらばらです。一部の方にとっては知っていることばかり聞かせられた、そうかと思えば突然難しくなったと怒られたりします。しかし、全然知らないという方が大部分です。そのあたりを考えながら、広く深く学業を見る必要があると思います。事業所がいろいろリスクコミュニケーションを行うならば、大学でそれに対応できる人材を育てていこうというだけではなくて、市民の中で活動するという視点も抜かさないようにしなければいけないかなと思います。

（酒井委員）

ありがとうございます。今のどんな方に参加いただいたかという話ですが、今回の二チ

八さんのモデルリスクコミュニケーションの場合は、名古屋市から地域の役員の方にこのようなことをやるので周辺の住民の方ぜひいらしてくださいとお願いしました。ただ、リスクコミュニケーションということで人数の制限が出てしまいますので、そういう意味でも意見交換の中に入らせていただくのは8名にしました。ただ住民の方でいろんな問題を持っている方もみえますので、傍聴としてある程度来ていただいてもいいですよということで来ていただきました。基本的にひとつの事業所のモデルリスクコミュニケーションにおいて、近隣の方に一番影響があると思いますので、そういった方に来ていただく。地域の役員の方を通じてということが多くなるのかなと思います。どのように周知していくか。また化学物質というだけで拒否されてしまう。リスクコミュニケーションの関係でホームページにもいろいろ出していますが、見ていただけているのか不安でもあります。化学物質というだけで見ていただけていないのではないかと思います。これをいかに見ていただくようにするか、いかに化学物質を知っていただく機会をもうけるかということで講演会をさせていただいていますが、なかなか集まっていけないのが現状です。どのようにやっていくのか大変なことだと思っています。

他にいかがでしょうか。

（杉江委員）

まずリスクコミュニケーションと聞くと市民の私たちは難しいことだと、この言葉に象徴されるような印象を持つ方が多いのではないかと思います。難しいからわざわざ行きたくない、そういったことがひとつあると思います。また事業所の方は、一足飛びにリスクコミュニケーションというのは敷居が高いというお話がありました。それを聞いていて思ったのですが、私も一足飛びにリスクコミュニケーションを前回のようにはできたらいいと思います。しかし一方で低い階段を上がっていくように、実際に市民や事業所の方が、リスクコミュニケーションのようなことを体験できるといいなと考えていました。

例えばひとつに、私は企業内のNPOでエコクラブをやっております。もうひとつは「エコエコ探検隊」という名前で子供たちに店舗の中を見学していただくことを毎年しています。このように、工場の方が例えば地元の子供さんプラス保護者の方10組くらいに募集をかける。そして2回くらいに分けて、1回目は工場見学、2回目は聞いてきたことについてまとめようということで簡単な新聞作りなどをする。その新聞作りのときにわからないことを工場の方に聞くというように、小さなひとつの探検隊のようなことを主催されたいかがかなと思います。その際、難しいことがよくわかる方に来て頂くまでもなく、一般的な環境カウンセラーの方に加わっていただく。例えば事業所の方が1人、親子が10組、環境カウンセラーの方が1人といったかたちで夏休みなどを利用してやられると、そこにいらした保護者の何名かは工場の中のことなどを知っていただけます。また家庭の中で会話が広がっていくという可能性もあると思いました。事業所の方がそういったことを例えば5年くらい進めていくとすれば、市民向けの環境カウンセラーの資格をとり、企業市民であって環境カウンセラーでもあるという立場で、そのようなリスクコミュニケーションに近いことをしていくとどうかと思います。そうすれば階段が低くて、具体的な体験を少人数でもできる気がします。リスクコミュニケーションはいろんなかたちがあるということが一番初めに聞きましたので、そのように思いました。

（酒井委員）

ありがとうございました。地域の見学やお子さんという話がありましたが、東レさんや大同さんでは、そのようなことはやっておられますか。

（奥山委員）

見学会は定期的にやっており、また不定期で小学校から依頼があって子供たちの見学会をやっております。また、地域の方ではありませんが、社員も住民のひとりですので、社員が子供と一緒に、引率つきで工場内をまわる。そこでいろんな意見を出して、みんなでお弁当を食べてということをして、先週もみんな汗だくになりながら行いました。

（小池委員）

弊社の場合は、今年中学生に工場見学をしていただきました。この見学では危険物を多量に扱っている職場は案内しておりません。危険物を扱っている職場では、制電性の服や靴をはいて作業をしているため、皆さんに多数用意できないこと及び企業秘密の区域もあって、工場見学は原則お受けしておりません。また、保温のさびや一見古い印象もあり、工場見学を受け入れるに当たっての心理的な障害にはなり得ます。

（酒井委員）

周りの方はそういう不安を知らないから、余計不安があるのかも知れませんね。中に入ってみれば思ったほどでもないなということもあると思います。そういった意味でリスクコミュニケーションはいい機会になるのかもしれないですね。

（小池委員）

先ほど申し上げましたように、地域の方に直接話を聞いた時、時々煙と臭いが出ているよとおっしゃられたので、調査して改善のための対策を推進中ですが、懇談会でこのような話が出ることはあまりないので、こういったリスクコミュニケーションはどこかで必要だなと感じています。

（酒井委員）

鍍金だと難しい部分があると思いますが、いかがでしょうか。

（伊藤委員）

同業者や協会のメンバーなど各県から来て見学させてほしいということで、行ってはありますが、それ以外の地域の人とか小学生の見学会も数年前はあったのですが、最近はあまりないのが現状です。機会があればすぐ近くに小学校がありますので、一度その辺からやると、リスクコミュニケーション普及課題にあります中小企業におけるリスクコミュニケーションの推進という面で、先ほどから聞いていていいのかなと思います。これもひとつの方法かなと思っています。

（酒井委員）

ありがとうございました。見学会などをやっておられるところが結構多いですね。ただ、それがリスクコミュニケーションの意見交換とまではいかない部分があるのかなと思います。このような場をきちんとセットしないと、なかなか意見交換ができないのだなという感じがしました。八尾委員がおっしゃられたように、いろいろなリスクコミュニケーションがあると思います。なかなか自由に意見交換ができる場が少ないなあと思います。

そのほか私どもが素案をつくる上でいろいろ参考にさせていただきたいと思います。この機会に何かご意見いただけたらと思います。

（森田委員）

私はこのモデルリスクコミュニケーションがあった後で、こういったことがあったという話をいろんな機会に話させていただきました。私が質問した、粉じんをいかに抑えるかという問題で、乾式をやめることができない、むしろその方が商品としての可能性が高いという話から、消費者のほうも考えなくてはいけないねという話もしました。消費者も環境にいいことを考えたとき、原因に対して見る目が深くならなければいけない、あれもほしいこれもほしい、そのためには何を差し置いてもということだけではいけないのだ、逆に言えば生産者と作りあげていかなければならないところがあるのではないかと、ニチ八さんのリスクコミュニケーションだけでここまで話し合いをしました。しかしどんどん作っているのは企業なのだから、作るほうが悪いのだと非常に厳しい意見を言った方もみえました。

リスクコミュニケーションの限界というのはどこかにあるのでしょうか、最大限努力するのは工場側だけでは成立しないと思います。しかし、そのことを住民側に働きかけるには非常にソフトで分かりやすくしなければ難しいと思いました。

環境、自然を見に行くというファシリテーター養成について聞いたときに、専門性のない人のほうがいいと言われたことがあり、びっくりしました。知っているという配慮や背景は、コミュニケーションを難しくするということらしいです。それならば、人材というのはどこからでも持ってこられるかもしれません。ただ、私は化学的な専門知識が全くないというのも不安に思います。流して終わりにすればいいとなるのではないかと、という不安を感じます。やはり化学物質について最小限の伝えたいこと知りたいことはきちんとおさえていかなければならないと思います。ファシリテーターについては、その両面を考えていく必要があると思います。

（酒井委員）

ありがとうございました。環境教育も必要になってくると思います。
他に何かございませんでしょうか。

（齋藤委員）

この会の冒頭にもありましたが、リスクコミュニケーションという名前でなくても企業の方と住民の方のつながりは、催しが行われるなど機会がたくさん設けられているということです。ここから発展して会社の方と一般の方との間で問題を出し合えば、これはすぐ

にリスクコミュニケーションにつながると思います。そういう意味でリスクコミュニケーションの基盤はある意味できているのかなと思います。これらをできるだけ利用して、以前は懇親会をやってお開きということが多かったのだと思いますが、これに一味つければきっと実りあるものになると思います。そういうかたちで進めていくのが一番手っ取り早いのかなと思います。

（八尾委員）

企業の方が今本音で話しておられるか私は気になりました。企業にとってメリットがないと行動を起こしにくいと思います。それがどこにあるのか、前回のニチ八さんで行ったやり方で、あるメリットはわかっていただけたと思います。一方、手間ひまなど会議を持つことのデメリットを考えると、二の足を踏まれるのもよくわかります。CSR（企業の社会的責任）など、きれいな話でやろうよということはそれはそれであるのですが、リアルな話でどこまでメリットが上がればリスクコミュニケーションをやろうとなるのか、企業の方の本音をもっと聞きたいと思いました。この場で戦わせるのか、それぞれが持ち帰って業界等でシビアな議論をしていただきたいなと思います。今のままではきれいな話だけで、結局普及しないで終わってしまいそうな懸念を正直感じます。

何度も言いますが、会議のやり方はあれが一番いいとは思っておりません。あれはかなり手間もかかり、会社のほうの負担も大きいことを理解していただいた上で普及してもらう。皆さんの企業姿勢を、地域住民の方に理解していただくことを考えていけたらなと思います。

ひとつ兵庫県西宮市の事例ですが、子供たちや市民に打って出るような事業やプログラムを、異業種でチームを作って授業するそうです。何のためにやるかという企業研修、係長研修のような研修としてやるそうです。これを行うには自分たちの仕事をよく理解しなければだめ、いい面と悪い面の両方を押さえなければだめ、それを子供に教えられなければだめ、わかりやすくなくてはだめです。また実際にやってみて反応が出る、それが人材のスキルアップ、につながる。このように研修費を投入してやられています。

リスクコミュニケーションだけにすべてを投入することはできないのかなとは思いますが、このようなお金の確保も含めて、あと2回にもう少しこの距離を近づけて本音トークができたらと思います。

（酒井委員）

ありがとうございました。いろんな意見いただきました。事業者の方もなかなか難しいということ、その上であと一工夫すればうまくいくのではないかというお話をいただきました。そんな意味でも、おそらく推進するための組織は必要なのではないかと思います。

（杉江委員）

先ほど申し上げた私の意見の後に、酒井委員が名古屋市としては前回のようないろんな立場の方が集まって、会合してリスクコミュニケーションをしていきたいということをおっしゃりました。それを聞きながら思ったのですが、例えば私が申し上げたようなことをリスクコミュニケーションの事前学習みたいなかたちで、親子であってもどなたが対象者

であってもいいのですがそういった探検隊や見学会をされることが、身近な化学物質に関する情報の提供ということになると思います。本当のリスクコミュニケーションの前にみんなが話しやすい空間を作る、少し工場を見た人などがリスクコミュニケーションに入ると、ワークショップでいうアイスブレイクのように、話もしやすく意見も活発に出て本音が出るのではないかと思います。事業者の方も1、2度学習会や見学会で顔を合わせている人たちとリスクコミュニケーションができるとなると、意思の疎通がスムーズにいきやすいのではないかと思います。ぜひ、事前に何か学習のようなことをしてリスクコミュニケーションをしていただき、その後でできれば有志だけでも構いませので、本当にまとめのようなことをしていただくといいなと思います。私も子供の環境学習をやっていて体験だけで終わるのではなく、まとめをしてこそ根付く、知識が中に入っていくと思っています。体験だけ、会議だけ、リスクコミュニケーションだけで終わらないように、手引書などにフィードバックしていただければなと思います。

（酒井委員）

今回のモデルリスクコミュニケーションを取りまとめさせていただいたものについては、ホームページにのせてできるだけ多くの方に見ていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

（事務局）

皆さん長時間にわたりありがとうございました。

先ほど懇談会の再任を皆様にご承認いただいたと思っております。次回第7回の懇談会は11月から12月頃に開催する予定です。日程調整表につきましては近々お送りさせていただきます。また委員の再任につきましても手続きを進めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それではこれもちまして第6回の懇談会を閉会させていただきます。皆様どうもありがとうございました。